



Seiji Togo Memorial Sompo Japan Museum of Art

# REPORT 2013

損保ジャパン東郷青児美術館

No. 41

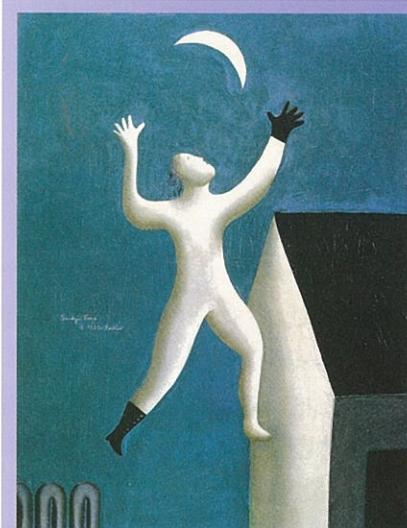
2014年9月1日、美術館名称が変わります。

新名称は、「東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館」です。

館の運営組織である財団の名称も

「公益財団法人 損保ジャパン日本興亜美術財団」に変わります。

これを機に、あらためて活動の概要をご紹介します。



東郷青児記念  
損保ジャパン日本興亜美術館

Seiji Togo Memorial Sompo Japan Nipponkōa Museum of Art

東郷青児《超現実派の散歩》1929年  
油彩・キャンヴァス 64×48.2cm

左の作品は当館の新しいロゴマークになった  
東郷青児の《超現実派の散歩》です。  
青児はパリから帰国した翌年、  
この絵を「超現実派の試運転」と称して  
第16回二科展に発表しました。  
記憶に残る魅力があり、「前衛芸術の日本」展  
(1986年、ポンピドゥー・センター)  
など海外でも紹介されました。

**1** 1976年、損保ジャパンの前身会社  
のひとつ安田火災は新宿に本社  
ビルを新築、その42階に「東郷青  
児美術館」を開設するとともに美術財団を  
設立しました。美術館では展覧会開催のほか、  
新進作家の支援や、美術鑑賞の教育普及などに力を入れています。

## コレクション

当館の収蔵品の中心は、1978年に逝去した洋画家・東郷青児の遺族から寄贈を受けた作品約400点です(うち青児の作品

201点、その他は青児の収集品)。青児は安田火災とその戦前の前身会社時代から印刷物のデザインを手がける間柄でした。その他の収蔵品は支援・表彰事業の買い上げ作品と受託作品です。なかでも1987年に安田火災が購入・寄託したゴッホの《ひまわり》は、当館の運営方針にも大きな影響を与えました。《ひまわり》公開後の年間観覧者数は前年からほぼ10倍に増え、以降、年に1~2本はフランスを中心とする近代絵画展を開催、近年の年間観覧者は15万人前後です。



ひまわり缶クッキー  
980円  
9.5×13.5×高さ6cm

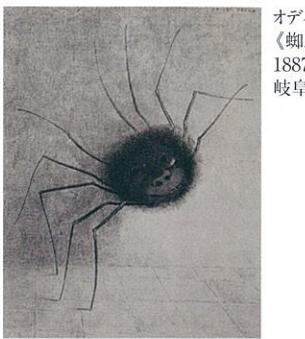
## ミュージアムグッズ

当館オリジナル「ひまわり缶クッキー」は、東京会館のクッキー詰め合わせです。常設展示しているゴッホの《ひまわり》をモチーフに缶を作りました。お手ごろな価格で、お土産としても人気です。食べ終わった後には缶を小物入れなどにも。ミュージアムショップで販売しています。



## オディロン・ルドン—夢の起源

オディロン・ルドン(1840~1916)は、外界を重視し現実社会を描く印象主義が台頭する中、内面を重視し夢の世界を描いた画家です。ルドンは印象主義に対抗する象徴主義の巨匠としてその地位を確立しましたが、一方で実証的な自然科学にも関心を持ち、その影響はルドンの幻想的な作品に見ることができます。本展覧会は、ルドンの芸術の基盤となつた「幻想」と「自然科学」という相反する分野への関心が、生まれ故郷であるフランス南西部の町ボルドーで育まれていたことに注目し、青年ルドンがボルドーで何を学んだか、そしてこのボルドーでの発見がその後の「黒」や「色彩」の作品にどのように反映し展開していったのかを、版画、木炭画、油彩、パステル画など、約150点もの作品でたどったものです。フランスのボルドー美術館、ならびに日本における最大のルドン・コレクションを所蔵する岐阜県美術館の全面的な協力の下、ルドンの「夢の起源」に迫ったこの展覧会は、当館を皮切りに、静岡市美術館、岐阜県美術館、新潟市美術館の全国4会場を巡回しました。

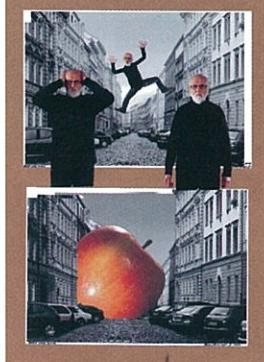


オディロン・ルドン  
『蜘蛛』  
1887年 リトグラフ  
岐阜県美術館

展覧会名 | オディロン・ルドン—夢の起源  
会期 | 2013年4月20日(土)~6月23日(日)  
主催 | 捨保ジャパン東郷青児美術館、朝日新聞社  
協賛 | 捨保ジャパン  
後援 | フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本  
協力 | エールフランス航空  
企画協力 | ホワイトインターナショナル

## 〈遊ぶ〉シュルレアリズム —不思議な出会いが人生を変える—

ユルレアリズムとは、第一次世界大戦後のパリに始まり、やがて世界中に波及した20世紀最大の芸術運動です。夢や無意識、非合理的な世界に目を向けることで、現実の新しい見方と生き方を探り、伝統の枠から自由な芸術表現をめざしました。



ヤン・シュヴァンクマイエル  
『映画『サヴァイヴィングライフ』のためのコラージュ』  
2009年 コラージュ、紙 ペトル・ホーリー氏蔵  
© Jan Švankmajer, 2013

そのためシュルレアリストたちは、偶然がもたらす驚異や、互いに無関係なイメージの結びつきなどに「不思議の美」を見出し、斬新的な作品を作り続けました。例えばデカルコマニー=写し絵、フロッタージュ=こすり絵、コラージュ=はり絵などは、正規の美術教育から自由な「遊び」にも似た手作業が生み出した代表的な作品群です。

本展は、このようなシュルレアリズムの精神と創作を「遊ぶ」というキーワードでとらえ紹介する国内初の展覧会です。仏文学者で明治学院大学名誉教授の巖谷國士氏の監修により構成、国内コレクションを中心にデュシャン、マン・レイから、瀧口修造、現代の

シュヴァンクマイエルまで、多彩な作家の絵画、写真、彫刻、オブジェの他、雑誌・書籍などを含む約200点を展示しました。

また会期中、来館者にシュルレアリズムの作品づくりの手法を体験してもらうワークショップを併設しました。

本展は4月に開幕した徳島県立近代美術館を経て当館に巡回し閉幕しました。

展覧会名 | 〈遊ぶ〉シュルレアリズム  
—不思議な出会いが人生を変える—  
会期 | 2013年7月9日(火)~8月25日(日)  
主催 | 捨保ジャパン東郷青児美術館、読売新聞社  
協賛 | 捨保ジャパン、日本興亜損保  
後援 | 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本  
協力 | 日本航空、日本通運  
企画協力 | アートプランニングレイ

## トスカーナと近代絵画—もうひとつのルネサンス—

近 年、中世末期以降のフィレンツェ絵画を紹介してきた当館では、フィレンツェのピッティ宮近代美術館所蔵の絵画約70点を展示した本展によって、1960年代までの通観が一段落しました。本展では1860年に成就した一連のイタリア統一運動においてフィレンツェが全国の美術界を牽引したことを伝え、その後、19世紀末から第二次大戦後までフィレンツェ絵画界の変遷を概観しました。日本ではルネサンスやフランス近代に比べてイタリア近代美術展はまだ少なく、なかでもミ

ラノやローマではなくトスカーナ地方の近代絵画を系統的に見る貴重な機会であったといえましょう。150年にわたる絵画群に共通する端正で的確な描写には、ルネサンスの巨匠達を生んだ地ならではの伝統が感じられました。本展は当館、佐倉市立美術館、群馬県立近代美術館、鳥



取県立博物館で開催されました。

展覧会名 | フィレンツェ ピッティ宮近代美術館コレクション  
トスカーナと近代絵画  
会期 | 2013年9月7日(土)~11月10日(日)  
主催 | 捨保ジャパン東郷青児美術館、読売新聞社  
協賛 | 捨保ジャパン、日本興亜損保、みずほ銀行、  
共済企画センター  
後援 | イタリア外務省、イタリア大使館、  
イタリア文化会館  
協力 | アルテリア、日本通運、  
アリタリアーイタリア航空、日本貨物航空  
企画協力 | アートプランニングレイ

ジョヴァンニ・ファッターリ《従姉妹アルジアの肖像》  
1858~60年頃 油彩・厚紙  
© Galleria d'arte moderna di Palazzo Pitti

## 「対話による鑑賞会」

教 育普及としては、子ども向け展示解説「ジュニア版ブックレット」などの他、「対話による鑑賞会」を実施。6年目を迎えた鑑賞会をクローズアップします。

### 「対話による鑑賞会」とは?

鑑賞会は笑顔で溢れています!子ども達は数人ずつガイドスタッフ1~2名と組みます。作品をじっくり見て、自分の気持ちや考えを言葉で仲間に伝え、さらに仲間の言葉を聞いて、もう一度作品を見ます。ガイドスタッフは子ども達が話すサポートをします。

絵を見て話す能力は、同年代の子どもの間では大差ありません。ある意味すべてが「正解」となる「対話による鑑賞」では、どんな発言も「間違い」ではなく、受け入れられます。それは子ども達にとって大きな喜びであり、かけがえのない体験となります。普段の授業で発言しない子も、担任が驚くような発言を繰り返します。語彙を駆使し、思いを精一杯表現することで言語能力も向上します。作品の知識を聞くのではなく、作品を介して「何か」を学ぶことが重要なことです。知識に頼ることなく、鑑賞によって「作品の理解」という問題を解決した経験が、子ども達の「生きる力」を育むことを願っています。

### 運営組織と当館の役割

「対話による鑑賞会」は、新宿区教育委員会・区の外郭団体である(公財)新宿未来創造財団・当館の3者が協働で、新宿区立小中学校の図工・美術の授業を支援する事業です。具体的には、①実施校で担当教諭が行う事前授業 ②当館(休館日)で行う鑑賞会の二段階から成っています。

2007年、新宿区に立地する当館と、区



小学4・5年生の鑑賞会

立美術館を持たない新宿区が、『学習指導要領』の掲げる“地域や美術館などと連携して鑑賞能力や言語活動の充実を図る”という指針に基づいて教育支援を提案。1980年代半ばにニューヨーク近代美術館が開発したVTC(Visual Thinking Curriculum)という方法を基に、当館の担当者と各校の教諭が打合せを通じて「学習指導要領」に沿う内容を考えています。

### 【主な役割】

- 新宿区教育委員会=事業費負担、区内の小中学校への参加呼びかけ
- 未来創造財団=事業費の管理(資料代、参加校の来館時の送迎バス代等)、事前授業の日程調整・実施
- 当館=ガイドスタッフの募集・育成・派遣、鑑賞会の企画・実施

### ガイドスタッフの活動

ガイドスタッフは当館のボランティア募集に応じた方々です(現在第1~5期生:59名)。主な活動は、事前授業と鑑賞会のサポートです。事前授業では各校の図工・美術の授業へ出向き、アートカード(展示作品の絵はがき)をカルタの絵札に見立てた「読み札作成」や、カードの「共通点探し」、「オリジナルタイトル作り」など、作品を細かく鑑賞する練習をしながら、子どもと交流を図ります。そして後日に当館で行う「鑑賞会」では、事前授業と同じ班の子ども達と組み、彼らの言葉を引き出しています。

子ども達と共に発見・感動する活動は楽しくもあり、真剣勝負もあります。この難しさと向き合うモチベーションを維持するため、当館では様々な研修を提供しています。2013年度には展覧会での演習5回、勉強

会4回、分科会3回を実施。春には東良雅人氏(文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官)による講演会、秋には福のり子氏(京都造形芸術大学教授)によるレクチャーとワークを開催しました。また、ガイドスタッフが中心となって作成する活動内容の手引き書を改訂したほか、損保ジャパンの協力を得て避難訓練や救命講習も実施しました。

### ギャラリー★で★トーク・アート

「対話による鑑賞会」でノウハウを培ったガイドスタッフに協力を仰ぎ、2011年度からは当館独自に大人から子どもまでの参加を公募する『ギャラリー★で★トーク・アート』も始めています。トーク・アートは展覧会ごとに休館日1日を選んで開催し、当館のチラシやホームページで事前に参加者を募る予約制(20名程度)です。休館日なのでミュージアムショップは利用できませんが、少人数で言葉を交わしながらの鑑賞では、ふだんと異なる発見があったとの感想が寄せられています。



小学5年生の鑑賞会 対話の後の自由鑑賞

### 2013年度の記録

「対話による鑑賞会」では、区内の全小学校29校と中学校(全10校中)7校を支援しました。また、教育支援を長期にわたり区と協働で展開してきたことが(公社)企業メセナ協議会で評価され、「メセナアワード2013」において損保ジャパンと共に「対話でアート賞」を受賞しました。『ギャラリー★で★トーク・アート』には、年間で約120人が参加しました。

## クインテット—五つ星の作家たち

**当** 館は、積極的に作品を発表している5作家を選び、『クインテット』(五重奏)と題するシリーズ展覧会を開催します。その第1弾として選ばれたのが、風景をテーマとする児玉靖枝、



児玉靖枝《氣配一萌え木》2008年  
油彩・キャンヴァス  
撮影: 大島拓也

川田祐子、金田実生、森川美紀、浅見貴子です。

彼女らは、日常接する景色・気配を、それぞれの方法で咀嚼し、自分なりの表現方法で風景を描写しています。写実的に捉えるというよりも、事物の特徴を際立たせ抽象化することで、季節、時間、天候、そして時代の空気、心象、記憶などを表現しているといえます。

児玉は季節によって移ろう草木や花、時には風や雨によって変幻する有り様をデジカメで撮影し、主観的イメージを写真の客観的イメージで再認識しながら制作しています。川田は「自然の記憶」をハッチングとスクランチで制作し、見る人にとって様々に想起される景色を描いています。金田は日常の

気配を、そのささやかなモチーフにも密かな強さがあり、見るものの感性によって壮大なロマンにも発展することを信じ描いています。森川は「各地を旅行して堆積された記憶が再現された時の幸福感」を滲みを大胆に取り入れて描いています。浅見は樹木の構造を把握するまで写生し、和紙の裏側に墨と胡粉で描き、季節や時間によって変化する光や空気感を捉えています。

出品作家たちの近作・新作70点は、見る者の想像力を喚起し、無限に広がる「視覚の愉しみ」を感じさせます。

## 【展覧会データ】

展覧会名 | クインテット—五つ星の作家たち  
会期 | 2014年1月11日(土)~2月16日(日)  
主催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、朝日新聞社  
協賛 | 損保ジャパン、日本興亜損保

FACE 2014 損保ジャパン美術賞 グランプリ  
川島 優 Yu Kawashima 《Toxic》

1988年生まれ 愛知県在住 日本美術院研究会員  
2012年 再興第97回秋の院展 入選  
2013年 愛知県立芸術大学 卒業制作桑原賞  
愛知県立芸術大学美術学部美術科日本画専攻卒業  
第68回春の院展 入選  
再興第98回秋の院展 入選  
グループ展「10 doors」(銀座三越・東京)

**圧** 倒的な存在感で審査員を魅了し、第一次「賞審査」から高得点を獲得した川島優の作品は謎めいた不思議さに溢れています。麻紙の上に墨・岩絵具・箔という伝統的な日本画の画材で描かれていますが、コンクリート打ち放しの壁前に座りこむ若い女性のモチーフは大胆で現代的です。箔を押した格子状の床も不規則に乱れ、女性の方向に三角形の頂点が向いているのも何か暗示的です。流行を意識したような短い髪の女性は見るものを凝視し、その視線から逃れるのは困難です。相対的に短い腕から推測

するに小柄な女性だと思われますが、「有毒な」「中毒の」という意味があるToxicという題名も、観者にこの女性に関して想像力を膨らせます。作品本位の審査で作家の性別、年齢などは審査後に判明したのですが、現在愛知県立芸術大学大学院1年生で25歳の川島優は「将来国際的にも通用する可能性を秘めた」(公募規定より)作家であり、今後の活躍が期待されます。

## 【展覧会データ】

展覧会名 | FACE展 2014 損保ジャパン美術賞展  
会期 | 2014年2月22日(土)~3月30日(日)  
主催 | 損保ジャパン東郷青児美術館、読売新聞社  
協賛 | 損保ジャパン、日本興亜損保



《Toxic》2013年  
墨・岩絵具・箔・麻紙  
194×111cm

## REPORT

損保ジャパン東郷青児美術館レポート No. 41

発行日 | 2014年3月(年1回発行)

編集・発行 | 公益財団法人 損保ジャパン美術財団  
デザイン | 若林純子  
印刷 | 吉田印刷

所在地 | 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 損保ジャパン本社ビル42階  
電話 | 03(3349)3081 [代表] ファックス | 03(3349)3079



ゴッホ《ひまわり》のある美術館

損保ジャパン東郷青児美術館



ホームページ <http://www.sompo-japan.co.jp/museum/>  
お問い合わせ  
ハローライフ 03(5777)8600